

部活動への関与による問題行動傾向の抑制効果

郡司 惇史*・伊藤 裕子**

本研究は、部活動への関与による問題行動傾向の抑制効果を検討することを目的とし、因果モデルを想定して検討を行った。対象者は、高校を卒業した年の大学1年生203名とし、部活動経験、学校適応感としての居場所感、疎外感、規範意識、問題行動傾向が尋ねられた。結果は、部活動への参加経験が長いほど空虚感、ぐ犯許容性および問題行動傾向は低減し、居場所感は増大し、また性差は、犯罪許容性、問題行動傾向とも男子の方が高かったことが示された。また、因果モデルでは、女子において部活動への参加経験が居場所感を高め、空虚感とぐ犯許容性を低減させ、そのことが問題行動傾向を抑制するという仮説は概ね支持されたが、男子においてはそれらが問題行動傾向につながらなかった。部活動への関与における性差の問題が議論された。

Key Words : 部活動, 居場所, 問題行動傾向

問題と目的

現在の日本は、高等学校への進学がほぼ義務化しており、学校に適應できない高校生も増加の傾向にある。それに伴い、学校生活への不適應に端を発した問題行動も増加している。青年にとって最も身近な社会である学校生活への不適應は、以前から問題行動を引き起こす重要な要因として扱われていることから(伊藤,1993)、青年の問題行動を抑制するためには、学校生活への不適應を軽減しなければならないと考える。

そこで本研究では、まず、学校生活への適應を測る指標として、居場所感に着目した。岡村・加藤・八巻(1995)は学校不適應者の激増を受けて、学校現場での「居場所」の重要性を主張

* 大学院人間学研究科

** 人間学部心理学科

していることから、居場所感は学校生活への適応において重要な要因であると考えられる。居場所感を獲得する上で、同年代の友人との関わり合いは必要不可欠なものであり、不安や葛藤など精神的ストレスの多い青年期に、同性の親友的存在の獲得が重要になってくる（齊藤, 1993）。そこで本研究では、クラスや学級とは異なる、中学生・高校生にとっての人間関係形成の上で重要となる部活動（矢野, 2006）に着目した。

東京・新潟・静岡の1都2県の高校生4,784名を対象とした部活動に関する調査では、全体で68.0%（男子63.5%、女子73.9%）の部活動加入率が示されており、引退や退部などの分を加えると82.7%の生徒が加入経験をしていた（藤田, 2006）。このことから、かなり多くの高校生にとって部活動は高校生活の大きな一部を占めているといつてよいだろう。さらに、矢野（2006）が言うように、部活動に熱心に取り組むことにより、「仲のよい友だちができる」や「精神的に強くなる」などさまざまな効能が得られることが指摘されている。したがって、高校生の部活動を「居場所」として研究することは今後の青年期の問題を考えていく上で有効なものになると考えられる。しかし、現在まで「居場所」と学校現場との関連は多く報告されているが（稲葉・西・古川・浅川, 2001；檜皮・浅川・古川, 2002）、「居場所」としての部活動を検討した研究はあまりみられず（比山, 2009）、さらに高校生を対象とした「居場所」の研究は極端に少なくなる（渡辺・小高, 2006）。そこで本研究では、高校を対象に、学校現場の中でもクラスや学級とは異なる集団で構成される部活動との関連を検討していく。

さらに本研究では、青年の問題行動を引き起こす要因として疎外感および規範意識に着目した。疎外感は、宮下・小林（1981）が、非行少年のほうが、一般少年よりも疎外感が高かったことを報告しており、非行との関連を示している。また、規範意識は、秦（2000）が問題行動を起こす要因として規範意識の低下をあげており、問題行動に対して「絶対にしてはいけない」という割合が小・中・高校生とといったように学校・学年段階があがるにつれて低下していくことを示した。また、規範意識において山岸（2002）が、青年期に自我理想の対象となるような友人や、理想的なモデルになる大人がいないことも規範意識を更に弱体化させると示唆していることから、部活動での友人や顧問等との人間関係形成は青年の規範意識を向上させる上で有効なのではないかと考えられる。しかし、現在において部活動と規範意識との関連を調べた研究はみられない。そこで本研究では、疎外感および規範意識を取り上げ、部活動の「居場所」としての効果と合わせて関連を検討していく。

以上のことから、本研究は、部活動への関与による問題行動傾向の抑制効果を検討することを目的とする。具体的には以下の2点が仮説としてあげられる。仮説1：部活動への関与により居場所感が向上することで、疎外感は低減し、規範意識は向上する。仮説2：仮説1より、部活動への関与により問題行動傾向が抑制される。これらを本研究の仮説とし、図1に想定される因果モデルを検証する。

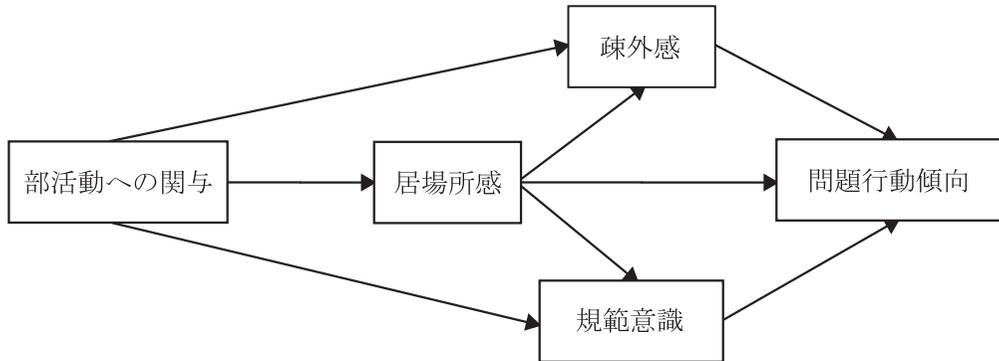


図1 因果モデル

方法

調査対象者

私立大学の大学生 203 名（男子 89 名，女子 114 名）を調査対象者とした。平均年齢は男子 19.57 歳（*SD*1.52），女子 18.47 歳（*SD*0.68）であった。

調査内容

疎外感：宮下・小林（1981）が作成した疎外感尺度のうち，周りの環境によって変化すると考えられる対人的疎外感としての孤独感 12 項目，および社会的疎外感としての空虚感 9 項目の 21 項目を使用した。評定は「全くそう思わない（1）」～「非常にそう思う（5）」の 5 件法で求めた。

居場所感：斎藤（2007）が作成した高校生における学校の居場所感尺度 13 項目のうち，前述した孤独感と重複すると考えられる「孤独感を感じる」という項目を除外した 12 項目を使用した。評定は「全く感じない（1）」～「とても強く感じる（5）」の 5 件法で求めた。

規範意識：松井ら（2006）が作成した犯罪許容性 4 項目，ぐ犯許容性 6 項目の 2 因子から構成される非行許容性尺度 10 項目を使用した。評定は「たいしたことはない（1）」～「非常に悪いことだ（4）」の 4 件法で求めた。

問題行動傾向：伊藤・高野・菰田（2006）が作成した問題行動傾向尺度 11 項目を使用した。評定は「まったくやらない（1）」～「よくやる（5）」の 5 件法で求めた。

部活動への関与：参加経験（経験なし～引退までの 7 段階）他を尋ねた。

調査方法 調査は，2009 年 7 月に授業時間を使用して一斉配布しその場で記入，回収を行った。回答は全て回想法を用いて行い，調査開始時に「高校時代を思い出しながら答えてください」と教示した。

結 果

1. 尺度の検討

疎外感尺度 孤独感および空虚感の 21 項目について、因子分析（主因子法，promax 回転）を行い、2 因子解を得た。α 係数は、空虚感が .93、孤独感が .91 となり、高い信頼性が保障された。

高校生における学校の居場所感尺度 12 項目について主成分分析を行い、全ての項目が .60 で負荷していた。α 係数は .95 となり、高い信頼性が保障された。

非行許容性尺度 非行許容性尺度について因子分析（主因子法，promax 回転）を行い、2 因子解を得た。α 係数は、ぐ犯許容性が .83、犯罪許容性が .75 となり、高い信頼性が保障された。

問題行動傾向尺度 問題行動傾向尺度について主成分分析を行い、全ての項目が .45 で負荷していた。α 係数は .87 となり、高い信頼性が保障された。

以上から、本調査では、使用した全ての尺度において先行研究と同様の因子構造が得られ、またそれぞれの尺度において高い信頼性が保障された。

2. 部活動への関与と各概念との関連

部活動への関与として、部活動の参加経験から、全く参加していなかった群（経験なし群 29 名（男子 18 名、女子 11 名））、参加経験はあるが途中で辞めてしまった群（中退群 47 名（男子 29 名、女子 18 名））、部活動引退の時期まで参加していた群（継続群 127 名（男子 42 名、女子 85 名））の 3 群に分類し、それぞれ男女別に尺度得点の平均値を項目数で除し、項目平均を算出した。その際、犯罪許容性およびぐ犯許容性の尺度得点のみ解釈を容易にするため、全ての項目を逆転した。表 1 には、性別と参加経験による 2 要因分散分析結果を示した。

表 1 から、犯罪許容性、問題行動傾向において性別での有意な差が認められ、空虚感、居場所感、ぐ犯許容性、問題行動傾向において参加経験での有意な差が認められた。そこで多重比較（Tukey 法）を行ったところ、以上の概念全てにおいて経験なし群と継続群、中退群と継続群との間に 5% 水準で有意な差が認められ、最後まで部活動に参加したことで得点が有意に変化していたことが明らかになった。

以上から、参加経験が長いほど空虚感およびぐ犯許容性は低減し、居場所感は増大したことが明らかになった。一方、問題行動傾向はむしろ中退群で高かった。性差は、犯罪許容性、問題行動傾向とも男子の方が有意に高かったことが明らかになった。

表 1 部活動の参加経験および性別による各概念の平均値 (SD) と分散分析結果

	経験なし群		中退群		継続群		性別 <i>F</i>	経験 <i>F</i>	性×経験 <i>F</i>
	男子	女子	男子	女子	男子	女子			
孤独感	2.52 (0.95)	2.50 (1.20)	2.60 (0.66)	2.41 (0.76)	2.38 (0.76)	2.09 (0.69)	1.65	2.81	0.36
空虚感	3.60 (0.76)	3.15 (1.44)	3.10 (0.89)	3.09 (0.95)	2.79 (0.93)	2.59 (0.95)	2.23	7.97 ***	0.49
居場所感	3.11 (0.95)	3.27 (1.38)	3.19 (0.82)	3.34 (0.99)	3.44 (0.92)	3.73 (0.81)	1.69	3.41 *	0.12
犯罪許容性	2.08 (0.58)	1.61 (0.59)	2.17 (0.71)	1.68 (0.58)	2.01 (0.82)	1.54 (0.54)	18.14 ***	0.93	0.00
ぐ犯許容性	3.82 (0.23)	3.76 (0.44)	3.60 (0.71)	3.40 (0.49)	3.41 (0.62)	3.14 (0.71)	2.63	7.81 ***	0.29
問題行動傾向	2.10 (0.90)	2.15 (0.67)	2.42 (0.74)	2.02 (0.76)	2.09 (0.98)	1.53 (0.70)	4.84 *	5.00 **	1.60

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

3. 仮説モデルの検討

部活動への関与が問題行動抑制要因として効果があるのかを明らかにするため、因果モデル(図1)に基づいて、男女別に共分散構造分析を行った(図2・3)。分析を行うにあたり、観測変数は分散分析の結果から部活動経験で差のみられた、疎外感のうち「空虚感」、規範意識のうち「ぐ犯許容性」を採用した。また、各変数における潜在変数(誤差)は、分析の際には仮定したが図からは除外した。表2には各変数の相関を示した。

その結果、男子では、空虚感、居場所感、ぐ犯許容性から問題行動傾向へのパスが通らなかったため、モデルの適合度に関して正しい結果が得られなかった。したがって、問題行動傾向をモデルからはずし、再度分析を行った。その結果、得られたモデルは高い適合度を示した。また、 χ^2 値が1.264 ($df=2$)で有意でなかったため、このモデルは採択された。次に女子では、得られたモデルは高い適合度を示したが、RMSEA=.127であったため当てはまりが悪いと判断された。また、 χ^2 値が1.264 ($df=2$)で有意でなかったため、このモデルは採択された。

以上の結果から、男女によってパスの出方に違いがあり、特に男子においては居場所感、疎外感そして規範意識が問題行動傾向に影響を与えていないことが明らかになった。

表 2 各変数間の相関係数

	参加経験	空虚感	居場所感	ぐ犯許容性	問題行動傾向
参加経験		-.240 *	.193 *	-.281 **	-.311 **
空虚感	-.317 **		-.796 ***	.188 *	.252 **
居場所感	.144	-.700 ***		-.128	-.135
ぐ犯許容性	-.259 *	.007	-.042		.415 ***
問題行動傾向	-.035	.165	-.169	.069	

※イタリック体は女子

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

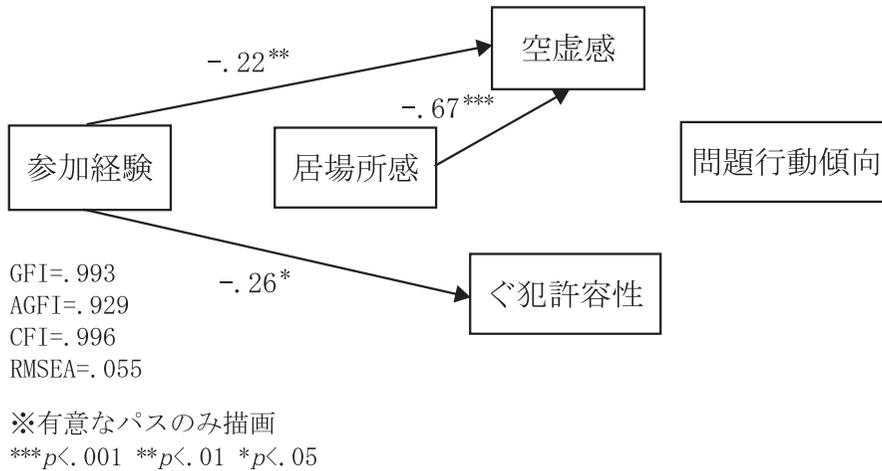


図2 男子における因果モデルの検討結果 (誤差は省略)

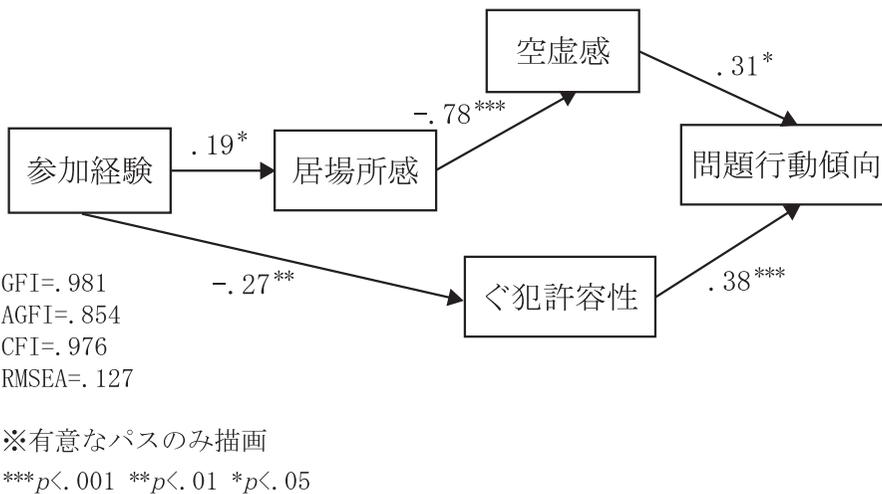


図3 女子における因果モデルの検討結果 (誤差は省略)

考 察

1. 部活動への参加経験と各概念との関連

まず、居場所感に関して、男女ともに参加経験が長いほど居場所感が増大したことが明らかになった。したがって、比山 (2009) と同様に、部活動は学校現場における居場所として効果があると考えられる。

次に、疎外感に関して、男女ともに部活動への参加経験が長いほど空虚感が低減したことが明らかになった。したがって、部活動へ参加することで生きがいを感じられ、空虚感が低減したと考えられる。しかし、男女ともに孤独感とは関連がみられなかった。岡村ら（1995）は、孤独感仲間との対人関係（対人的交流）によって増減することを指摘していることから、部活動にただ参加しているだけでは孤独感を低減する効果は少なく、そこに付随してくると思われる仲間との対人関係が重要であると考えられる。

次に規範意識に関して、男女ともに部活動への参加経験が長いほどぐ犯許容性が低減したことが明らかになった。その理由として、廣岡・横矢（2006）が中・高生を対象とし、学校に適応できていると感じていると規範意識が高いことを見出したことから、部活動に参加することにより学校への適応感が高まり、規範意識が増大したと考えられる。

最後に、問題行動傾向に関して、女子においては部活動への参加経験が長いほど問題行動傾向が低減していたが、男子においては、部活動中退群が最も高かった。したがって、部活動での挫折が問題行動を引き起こすことが示唆される。坂田・廣井（2007）が、高校部活動での挫折を契機に不登校に陥った生徒の事例研究を行っており、部活動が「居場所」の重要性を示唆しているといえよう。

2. 部活動への参加経験による問題行動傾向の抑制効果

本研究では、部活動への関与による問題行動傾向の抑制効果を検討するため、因果モデルを想定して検討を行った。その結果、男女によってパスの出方に違いがみられた。女子では、部活動への参加経験から居場所感・ぐ犯許容性へ、空虚感およびぐ犯許容性から問題行動傾向へパスが通ったため、部活動への関与が居場所感を高め、疎外感を低減させ、規範意識を向上させ、そのことが問題行動傾向を抑制するという概ね仮説に沿う結果となった。しかし、男子では、居場所感、疎外感そして規範意識が問題行動傾向に影響を与えておらず、仮説とは異なる結果が得られた。男子における問題行動の発生要因には、学校への適応とは異なる要因が働いていることが考えられる。

以上のから、部活動への関与による問題行動傾向の抑制効果は女子においてはほぼ認められたが、男子の問題行動に関しては、今後、別の側面からのアプローチが必要だと考えられる。

3. 今後の課題

今後の課題としてまず挙げられるのは、調査対象者の問題である。本研究では、調査内容の問題から、現役の高校生に調査を実施することが困難であったため、直近の大学1年生を対象に高校時代を思い出しながら回答してもらうという回想法を用いて行った。そのため、より正確な調査結果を得るには、やはり高校生を対象として行う必要があると考える。さらにもう一つは、男子部活動経験者に対してのさらなる研究である。本研究において、部活動中退群が最も問題行動傾向が高いという結果が得られ、部活動での挫折から問題行動へと移行してしまう

可能性が示唆された。そのため、因果モデルにおいても当てはまりが良好でなく、今後は、部活動以外の居場所を検討する必要があると考えられる。

引用文献

- 藤田武志 2006 生徒の部活動への関わり方 西島央（編）部活動－その現状とこれからのあり方－学事出版 Pp.21-40.
- 秦政春 2000 子どもたちの規範意識と非行・問題行動 大阪大学大学院人間学研究科紀要 26, 123-155.
- 廣岡秀一・横矢祥代 2006 小学生・中学生・高校生の規範意識と関連する要因の分析 三重大学教育学部研究紀要 57, 111-120.
- 檜皮万里子・浅川潔司・古川雅文 2002 高校生の居場所と学校適応に関する研究 日本教育心理学会第 44 回総会発表論文集 83
- 比山園恵 2009 「居場所」としての「部活動」についての考察 人文論究：関西学院大学人文学会 59, 209-223.
- 稲葉小由起・西悟史・古川雅文・浅川潔司 2001 中学生の学校適応と居場所に関する研究 日本教育心理学会第 43 回総会発表論文集 455
- 伊藤裕子 1993 現代青年の特徴 落合良行・伊藤裕子・斎藤誠一（編）青年の心理学 有斐閣 Pp.209-226.
- 伊藤裕子・高野由起子・菰田孝行 2006 高校生における携帯メールの心理的機能と問題行動傾向との関連 児童学研究：聖徳大学児童学研究紀要 8, 133-140.
- 松井洋・中村真・堀内勝夫・石井隆之 2006 「子ども」－比較文化研究からみた日本の子ども－川村学園女子大学研究紀要 17, 51-70.
- 宮下一博・小林利宣 1981 青年期における「疎外感」の発達と適応との関係 教育心理学研究 29, 297-305.
- 岡村達也・加藤美智子・八巻甲一 編 1995 思春期の心理臨床－学校現場に学ぶ「居場所」づくり－日本評論社
- 斎藤誠一 2007 大学生および高校生における心理的居場所感尺度作成の試み 千里金蘭大学紀要 4, 73-84.
- 斎藤誠一 1993 青年心理へのアプローチと課題 落合良行・伊藤裕子・斎藤誠一（編）青年の心理学 有斐閣 Pp.25-48.
- 坂田真穂・廣井亮一 2007 スクールカウンセリングにおける不登校への取り組み－援助過程における「父親」「母親」役割の試み－京都女子大学発達教育学部紀要 3, 23-32.
- 山岸明子 2002 現代青年の規範意識の希薄性の発達の意味 順天堂医療短期大学紀要 13, 49-58.
- 矢野博之 2006 部活動のなかの生徒の人間関係 西島央（編）部活動－その現状とこれからのあり方－学事出版 Pp.56-71.
- 渡辺弥生・小高佐友里 2006 高校生における「居場所」としての学校の認知について 法政大学文学部紀要 53, 1-15.

（2010.10.5 受稿，2010.11.2 受理）